手紙

隠岐の島町立西郷南中学校　一年　　田黒寧久

皆さんは手紙を送ったことや、もらったことはありますか。また、手紙を送る相手は、友達や家族ですか。それとも、見知らぬ人ですか。私は見知らぬ人から手紙をもらい、はげまされたことがあります。

私はずっと人見知りで、人と話すことが苦手で、自分から話しかけることができませんでした。五才のとき、喉の手術で、松江の病院に入院しました。そんなに重い病気ではありませんでしたが、でも、その頃の私にとって、病院は怖い所でした。だから、隠岐以外の病院に行くことは、ものすごく怖かったことを覚えています。

私の病院の部屋は、四人部屋でした。私の隣のベッドには、先に入院していた人がいて、その時は、少し気になっていました。入院してから、私は、いつも一人で遊んでいました。病院ではやることもなくて、また、手術が怖くて、いつも「帰りたい」と、毎日泣いていました。

ある日、いつものように、一人で遊んで、部屋に帰ってくると、手紙が置いてありました。それは、隣のベッドの人からでした。

「あなたの名前は？私は、〇〇です。何歳？遊べる日があったら、遊ぼうね。仲良くできるといいな。よろしくおねがいします。私は七歳です。２年生です。〇〇より」

と、書いてありました。私にとって、この手紙が人生で初めてもらった手紙でした。５歳だったので、字が読めなかったので、お母さんに読んでもらいました。名前と歳が分かったので、すごく嬉しくなったことを覚えています。次の日も、また手紙が来ました。

「手術がんばってね。私もがんばるから。」

と書いてありました。この手紙のおかげで、手術が怖くなくなりました。私は、手術が終わったら、手紙の返事を書こうと思っていたので、手術が終わり、手紙を書いて渡しに行きました。けれど、その時は、いなかったので、ベッドに手紙を置いておきました。でも隣の子は、いつの間にか、いなくなっていました。私は、すごく後悔しました。「一緒に遊ぼう」と書いてくれていたのに、遊ぶこともせず、顔を見に行くことさえしなかったからです。

手術後、麻酔がきれて、喉が痛くなりました。痛くてご飯を食べることができず、ずっと泣いていました。でも、隣のベッドの子からの手紙を何回も読んで、がんばることができました。退院して、隠岐の島に帰った後も、喉は痛いままでした。病院で手紙を通して仲良くなれた隣の子のことを思い出して頑張ることができました。

私は、このような経験をして、二つ考えたことがあります。

一つ目は、私のように人見知りでも、手紙などの手段で、見知らぬ人と仲良くなれるということです。手紙でも、電話でも、顔を見なくても、思いが伝われば仲良くなれると私は思います。だから、どんな方法でも、勇気をもって仲良くなりたい気持ちを伝えることが大切です。もしかすると、相手もあなたと仲良くなりたいのかもしれません。

二つ目は、手紙でも、直接話すことと同じように、人を励ますことができるということです。直接話すことは、気持ちが伝わりやすいと思っていたけれど、手紙でも気持ちをのせて相手に届けられる特別感があると思います。一生残るということも利点です。

現在、世の中は、人と人との関係が薄れ、人間関係を上手に作ることができない人が多くいると聞きます。そして、喧嘩やいじめで、自分の命を失う人もいます。私が病院で出会った隣の子のように、素直に、そして相手の気持ちを考えて、何気ない優しさで人を支えることができれば、この世の中は、誰もが安心して過ごせる場所になると思います。そして、誰もが、自分のことを大切にするだけでなく、周りにいる人の心の痛みや困り感に気づき、共に助け支えあえる社会になればよいと思います。

私は今でも入院した時に、隣の子からもらった手紙を読んで、勇気をもらっています。どんな方法でも、人は人を支えることができるので、温かい心で手紙を書いてみませんか、きっと、それが、誰かの支えになるはずだから…